

## 序 文

1950年4月に本学が誕生してから20年、人間でいえば成人式に相当する年令を迎えたわけである。この記念すべき年を祝し、さらに格段の発展を期する願いをこめて、『商経論叢』20周年記念号を刊行しようとする企画は、まことに有意義で時宜をえたものであろう。おもえば開学当初の商経科主任教授であられた村川 澄教授が、大学の使命である研究の実をあげる意図をもって、いち早く商経学会を結成し、機関誌『商経論叢』第1号を発刊したのは、1952年1月で、実社会へ巣立つ第1回卒業生への好個のはなむけとなった感激はいまなお忘れえぬ思い出である。じ来、毎年1回の刊行を重ね、1960年第9号の10周年記念号を経て、本年は第19号「開学20周年記念号」を世に問うことは、地域社会への使命の一端をも果すことであり、われわれの最上のよろこびでもある。いま、各号をあらためて手にして感慨一しお深いものがある。これらはいずれも執筆者一同の真摯な労作であり、そのまま本学会の充実発展をものがたる不滅の足跡である。この端緒を開き、もって今日の礎石を確立した村川教授に対し、また、それぞれの在任期間において本誌の育成に格別の努力をかたむけてくださった諸先生方および会員諸子に対して、ここにあらためて深甚の感謝の意を表するものである。

この数年来、世はまさに「大学改革」のとうとうたる風潮のさなかにあり、旧い伝統を捨てて、新しい時代の要請にこたえる研究・教育の大道を創り出すための努力を強いられている。他方、飛躍的な科学の進歩発展に適応する学問の形成は、一日の安逸をも許さない情勢である。このときにあたり、いまは他大学にあって輝やかな業績をあげておられるもと本学教官から、7つの玉稿を寄せていただいたことは、この記念号に錦上華を添えたものとして、心からの謝意を表するものである。

本記念号を一つの契機として、こんごますます研究を深め、一そうの充実を期し、もって大学に課せられた責務を果すことを念じながら、序文とする。

1970年10月1日

鹿児島県立短期大学商経学会会長

熊 本 帛 雄